

幼稚園における障害児保育の一形態

抽出小集団保育による個別援助の試み

磯野真紀子* 平沼博将** 井上容子* 谷掛玲子* 筒井まゆみ* 二ノ方宣絵*

(*平安女学院幼稚園 (m-isono@heian.ac.jp) / **京都大学教育学研究科)

問題・目的

幼稚園の概要

平安女学院幼稚園は高槻市北部の住宅街の中にあるが、園の西側は雑木林に隣接していて、自然に恵まれた環境で保育を行っている。また、平安女学院短期大学に併設されているため、通常の保育に必要な施設のほか、短期大学の教育研究所の施設（保育室、観察室等）が利用できる。園児数は、定員が3歳児16名、4歳児32名、5歳児32名の計80名であり、ほぼ毎年定員で保育を行っている。保育者は、クラス担任（各クラス1名）、フリー教諭、主任教諭が常勤勤務し、その他に障害児の受け入れ人数に応じて補助教諭（1999年度は5名）がクラスに加配される（非常勤）。

教育方針は、「自主的な遊びの中で思考力、想像力を育てること」と「共に生きることを通して、協力することや思いやりの心を育てること」を中心に置いている。障害児の受け入れは1968年より行ってきたが、それは「一人一人が違いを認め合い、共に生きる」ことの実践に他ならない。その姿勢は保育者が変わっても、園舎が移転してもなお引き継がれている。現在は施設、体制面ともに充実し、発達研究グループの協力も得られ、統合保育の様々な試みが可能となっている。

障害児の抽出保育実施の経緯とねらい

経緯：1993年3歳児クラスに入園したI君（自閉症）が落ち着かないときなどに補助教諭と共に教育研究所の保育室を利用するようになった。その後、4歳児クラスに在籍するSちゃん（自閉症）もそれに加わるようになり補助教諭同士の交流も増えた。また、担当教諭以外の視点が入ることで子どもに対する理解も深まるなどの効果も現れた為、保育の中に明確に位置付け、ねらいを持って取り組むことにした。1995年度からは「週1回の抽出保育」を始め、途中紆余曲折はあったものの現在の「たんぼぼ組」に至っている。

ねらい：子どもたち（特に対人面に弱さをもった子どもたち）に気持ちの切り替えができて、ホッとできる場所を保障する。発達の課題に応じた遊びにじっくりと取り組める場所と時間を保障する。（統合保育のときのような）大きな集団では友達とうまく遊べなかつたり、活動の見通しを持ちにくい子どもたちに、

子ども同士の関わりと、「集団の中の自分」を意識する経験を小集団により保障する。常勤教諭とは違い、保育についての話し合いをする時間が持ちにくい補助教諭同士の交流の機会を増やす。

本研究の目的

本研究では1999年度の抽出小集団保育（たんぼぼ組）に参加している子どもたちの発達の経過から、幼稚園における障害児保育の一形態としての「週1回程度の抽出小集団保育」の効果と課題について検討する。

方法

1999年度参加児の臨床像とたんぼぼ組での課題

K児（5歳男児）：医療機関においてアスペルガー型自閉症の診断を受ける。全般に中度の発達遅滞が見られ、常同行動やこだわりも強い。**た組**では、遊びの中で他児との関わりを増やすことが課題とされた。

D児（5歳男児）：言語発達の遅れ、共感関係のつくりにくさなど自閉的傾向がみられる。年長クラスになる頃からはトイレなどの身辺自立もすすみ、自我も出て「アカン」「イヤ」などの発語がみられるようになった。**た組**では、体感的な遊びや達成感の持ちやすい遊びを通して、発声を促し、他者との共感経験を積み重ねることが課題とされた。

T児（4歳男児）：全般に軽度の発達遅滞がみられ、特に自我の充実に課題をもつ。保育場面でも自分の主張が通らないと手がでたり、パニックになることがよくあった。**た組**では、遊びの中で他児とのやりとりを増やすようにして、自我をコントロールする経験を積み重ねることが課題とされた。

Y児（4歳男児）：言語・認知領域で軽度の発達遅滞がみられる。保育場面でも他児とのコミュニケーションがうまくいかずにトラブルになることが多く、自信をなくしがちになっていた。**た組**では、いろんな遊びに挑戦し自信を回復させると共に、スタッフが他児とのやりとりを援助することが課題とされた。

S児（3歳男児）：自由保育場面では楽しく遊べるが、全体活動になると場面理解ができず、動きまわったり、保育室を飛び出すことが目立った。友だちとのやりとりでも手がでることが多く、発達診断では全般に軽度の発達遅滞がみられた。**た組**では、保育の流れ

をイメージして行動を切り替える力、遊びの中で他児とやりとりする力をつけていくことが課題とされた。

「J児(3歳女児)」：医療機関の診断は受けていないが、過去に熱性けいれんを数回起こしており、視力の弱さと斜視がある。発達診断では全般に中度の発達遅滞がみられ、特に全身運動・手指操作での不器用さが目立つ。**「た組」**では、目標に向かっての全身運動、ままごと遊びなどでの道具操作の経験を増やししながら、他児への注目を促すことが課題とされた。

「N児(3歳男児)」：新しい場面・人への不安が高く、入園当初は担当教諭に抱かれて過ごすことが多かった。視線の合いにくさ、常同語などもみられ、医療機関でも自閉症と診断された。**「た組」**では、体感的な遊び、リズム運動などを通して楽しい経験を(担当教諭を中心に)他者と共有していくことが課題とされた。

たんぼぼ組の実施概要(1999年度)

実施場所：幼稚園併設の教育研究所の保育室。

実施日：保育期間中の毎週金曜日(午前中のみ)。

常設遊具：総合遊具(雲梯階段、踊り場、家、すべり台)、木馬、三輪車(自動車)、ボールプール、積木、ままごとセット、電車・バスのおもちゃ、絵本など。

スタッフ：参加児の担当補助教諭および主任教諭。

保育内容：自由遊びを基本としてきたが、今年度から各児の発達の課題に合わせて遊びを広げることと、場面の切り替えを意識させることをねらいに設定遊びの時間も設けた。トランポリン、小麦粉粘土、楽器遊び、ビー玉ころがし、散歩などに取り組んだが、楽しめたものを次週も続けてみたり、「街づくり」など2週にわたる取り組みにも挑戦した。

Table 1 たんぼぼ組プログラム(流れ)

9:45~10:15	登園順に自由遊び
10:15~10:30	片付け 体操(おはよう)
10:30~11:00	設定遊び
11:00~11:15	片付け 絵本 さよなら

保育記録：たんぼぼ組各回の様子は連絡ノートを通じて参加児の保護者に伝えると共に、設定保育の内容、各児の様子などを1枚の記録用紙にまとめ、長期的な視点での各児の変化を確認できるようにした。

保護者懇談会：抽出小集団保育の目的、各児の発達上の変化を保護者と確認すると共に、保護者同士の交流の場ともなるようにと、各学期末に行っている。園側からは担当教諭・主任教諭・発達相談員が参加する。

結果・考察

全体の様子と子どもたちの変化

全体の様子

はじめの数回こそ、体操や設定あそび導入などの変化にスタッフ、子どもたち共に戸惑いはあったが、昨

年度から引き続き参加している子どもを中心に設定場面でもよく遊べるようになった。新奇場面への不安が高いN児もはじめは担当教諭に抱かれて過ごすことが多かったが、好きな音楽を支えにしながら徐々に遊べるようになってきた。各児ともに、活動の見通しが持てるようになると納得して「おしまい」がつけられるようになった。また、子どもたちの「たんぼぼ組」というイメージも明確になり、たんぼぼ組が大好きな場として生活の中に位置づいてきたように思われる。

子どもたちの変化(発達の課題との関係で)

K児はたんぼぼ組以外で好きな遊びが増えてきたこともあり、「今日のたんぼぼはお休みします」と自主的に休むことが多くなった。D児はスタッフを遊びに誘ったり、達成感を共有したがつたりすることが増えた。また他児との物を取り合いでも自我をしっかり出せるようになってきた。一方、生活年齢、発達年齢が共に近いT児、Y児、S児の3人は、はじめのうちこそ物の取り合いなども多かったが、友だちに譲ったり、交代で遊んだりといった姿も見られるようになってきた。J児は直接的な関わりは少ないものの、他児の遊ぶ様子を見てモデルとして取り入れることで、新しい遊びに挑戦する姿もみられ始めた。N児も、2学期に入った頃から大人への要求が出はじめ、心の安定に大人を求めている段階から、遊びを共有する相手として大人を求める段階に入ってきたように思われる。

たんぼぼ組の今後の課題と展望

自由保育が基本の統合保育を中心とし、それを補う形で障害児の抽出小集団保育を実施してきた。しかし近年の参加児の増加傾向、障害の度合いの重度化傾向への対応が難しく、集団規模、実施頻度など再検討が必要になってきた。その際には統合保育とのバランス、保護者の意向との兼ね合いが課題となってくるが、職員、保護者の双方で抽出小集団保育や発達障害などに対する共通認識を構築していく必要があるだろう。また、設定内容によってはその遊びを楽しめない子どもが出るなど、各児の嗜好、発達課題を考慮に入れながら設定内容を考えることの難しさを感じている。

今後は、幼稚園という枠に止まらず、地域に開かれた障害児の療育・相談機関への発展を視野に入れた可能性を模索していきたいと考えている。

謝辞

本論文は、平安女学院幼稚園の沼田真理、中島千恵美、平田恵美子、竹下千砂子、塩澤真理の各教諭の協力を得て作成しました。この場をかりて感謝の意を表したいと思います。